

みんなの

わっ!!

この街、折尾ですごして

北九州市立大学国際環境工学部 世良洋輔

私が初めて折尾という街に来たのは、2004年の3月。もう5年近く前のこと。本来の志望校ではない北九州市立大学に合格し、4月からの住居を探すため広島県の福山から新幹線で小倉、そして、小倉から電車で折尾に来た時だった。どこに出口があるのか分からん複雑な駅、それが折尾に着いて最初に感じたことだった。今でさえ、その構造を立体的にイメージすることができない。この折尾駅、駅周辺の再開発のため、取り壊されると聞いている。2007年12月に知った堀川沿いのお店、立ち飲み凌や餃子兄弟が無くなるのは、この土地を離れる自分が言うのもなんだけれど、なにか悲しいように感じる。角打ちや立ち飲み屋で、見ず知らずのおじちゃん、おばちゃんと話ができる空間が好きなんだと思う。この土地に、自分が入り込めたような錯覚に陥るから。

今でこそ、そうなのだが、大学入学当初の自分には考えられないこと。初めてお酒を飲んだ日はサークルの歓迎会だったのだけれど、気持ち悪くなって吐き、酒なんか飲むか！と、トイレで一晩過ごしたことがあったから。好きだった人にふられ、朝方5時まで岩屋海岸で1人過ごした冬の日もあった。九州に来て、これから一生付き合っていきたい、と思える人々にたくさん出会った。高校生の彼女ができたこともあった。思いつきで、福岡駅でホームレスの人たちと一緒にダンボールで寝た冬の夜もあった。高校生の頃と違って、自分の興味のあることに参加していくようになった。

一番大きな変化は海外に興味を持ち、多くの国を渡り歩いたことだった。トルコのある街角では、「チャイ(ミルクティー)おごるよ」と言ってくる少年に出会い、その他国の人をもてなそうとする精神に驚いた。ウガンダの首都カンパラでは、「勉強がしたい」と泣きながら話してくるアレックスという少年から、自分の生まれた国の豊かさを知った。エジプト、ナイル川のほとりで「Welcome to Egypt」と笑顔で言ってくれる少女に、心を和まされた。ネパール、ポカラでは、8000mを超える山々の壮大きさに人間の小ささを感じた。次から次へ変わっていく風景・街の中で、いろんな人に会いながら、いろんな文化を垣間見ながら、人生ってなんだ、と考え続けさせられた。一人がとてつもなく寂しい夜があった。生きていることを最高に幸せだと感じた瞬間があった。ボサボサの髪と伸びっ放しの汚い髭姿で帰国し、両親に抱きついた。もっとたくさん世界を見たいと思い、始めた小倉北区のバーで働いていたある夜、お水の女性に頬を引っ叩かれたこともあった。この頃から、お酒を飲むのが好きになり、立ち飲みに通うようになった。門司港ではバナナの叩き売りの勉強を始め、則松市民センターでおばちゃんたちに交じって、インドで習っていたヨガを再開し、茶道を習い初めた。

てんでバラバラのことに中途半端に首をつっこみ続けてきたような気がするが、僕の大学生生活はこんなもので、あっという間の5年間だった。たまたま決まったこの街に来てから、たくさんのことを経験させて頂いた。ありきたりではあるのだけれど、この街に来ていて本当に良かった、と心から思っている。現在、旅をしながら思ったこと等を折尾駅東口付近、丸和と同じ1階にある「ゆめ広場」に展示しています。是非、足を運んでみて下さい。